

## 【解 答】

### 肝細胞腺腫

#### 解説：

本症例は、肝左葉に突出する6cm大の境界明瞭な腫瘍である。腹部超音波検査で内部均一な等エコー像を示した。造影CT検査では、造影早期に濃染し、平衡相で肝実質と比較し低吸収を呈する被膜様構造を有する腫瘍であった。EOB造影MRIでは早期濃染し、肝細胞相でEOBの取り込みを認めなかった。また、T1強調像opposed phaseで腫瘍内部の信号低下を認めたことから、脂肪成分を有していると考えられた。救急受診時には、腹腔内、腫瘍内に出血を疑う高濃度の液体貯留が認められた。造影CT、EOB造影MRI所見からは、肝細胞腺腫と肝細胞癌が挙げられる。本症例では境界明瞭な腫瘍で、背景肝は正常であったことから、肝細胞腺腫が最も疑われた。腫瘍破裂に対して緊急動脈塞栓術、待機的に肝亜区域切除術が施行された。腫瘍組織は、肝細胞癌を疑う所見はなく、異型の乏しい肝細胞が索状に増生しており（Figure 4）、肝細胞腺腫と診断した。

肝細胞腺腫は正常肝に生じる、まれな肝細胞由来の良性腫瘍である。欧米からの報告では経口避妊薬を服用している若年女性、ステロイド服用者、メタボリックシンドロームとの関連性が指摘され

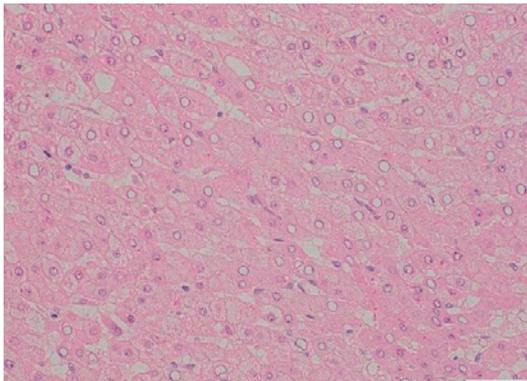


Figure 4. 肝腫瘍組織：HE染色。

ているが、本邦の報告では男性の症例が半数を占め、高齢での発症も多く、経口避妊薬の服用率も低いなど背景は欧米と異なり<sup>1)</sup>、本症例のように明らかな誘因がない症例も多く報告されている<sup>2)~7)</sup>。

肝細胞腺腫は無症状で偶然発見されることが多いが、腫瘍内出血や壊死をきたした場合は、腹痛や急性腹症の症状を呈することがある。臨床上的問題点は癌化と出血である。癌化に関しては、画像検査で癌との鑑別が困難な場合が多いが、肝細胞腺腫自体の癌化についての報告は非常にまれである。一方、出血に関する症例報告は散見され、本症例のように出血をきたすと緊急的な処置を要する。肝細胞腺腫の腫瘍出血および腫瘍破裂は、欧米の報告では20~25%の症例で認めるとされ、これらのリスクとして腫瘍径35mm以上、画像上確認できる周囲血管、左葉内、突出性などが挙げられており<sup>8)</sup>、本症例はこれらのリスクのうち3つを認めた。WHO分類（第5版）では異なる遺伝子表現型により4つの亜型（HNF1 $\alpha$ 不活性化型、 $\beta$ -catenin活性化型、炎症型、分類不能型）に分類され、それぞれに背景因子、出血、悪性化のリスクが異なっている<sup>9)</sup>。HNF1 $\alpha$ 不活性化型や炎症型は破裂リスクがあり、 $\beta$ -catenin活性化型では癌化リスクがあるとされているが、本邦では出血と亜型の関連についての報告は少ない。欧米の報告と比較して亜型の割合や背景が異なることから、本邦での症例の蓄積と詳細な検討が行われることが望まれる。

#### 参考文献：

- 1) 小西 大, 竜 崇正, 木下 平, 他：肝細胞腺腫の1切除例. 肝臓 36;223-229:1995
- 2) Sasaki M, Yoneda N, Kitamura S, et al: Characterization of hepatocellular adenoma based on the phenotypic classification: The Kanazawa experience. Hepatol Res 41;982-988:2011
- 3) 村上昌裕, 小林省吾, 永野浩昭, 他：高齢女性に発生した肝細胞腺腫の1切除例. 肝臓 51;35-40:2010
- 4) 土川貴裕, 市村龍之助, 阿部島滋樹, 他：NASHを背景に発生した肝細胞腺腫の1例. 日本臨床

外科学会雑誌 66;909-912:2005

- 5) 榎 忠彦, 守田信義, 平岡 博, 他: 巨大肝細胞腺腫の1切除例. 日本消化器外科学会雑誌 25;1999-2003:1992
- 6) 小林利彦, 佐野佳彦, 大久保忠俊, 他: 肝細胞腺腫の1切除例. 日本消化器外科学会雑誌 25;2373-2377:1992
- 7) 平島浩太郎, 本田由美, 石原園子, 他: 肝細胞腺腫の1例. 診断病理 27;201-206:2010
- 8) Deneve JL, Pawlik TM, Cunningham S, et al: Liver cell adenoma: a multicenter analysis of risk factors for rupture and malignancy. Ann Surg Oncol 16;640-648:2009

- 9) Bioulac-Sage P, Laumonier H, Couchy G, et al: Hepatocellular adenoma management and phenotypic classification: the Bordeaux experience. Hepatology 50;481-489:2009

本論文内容に関連する著者の利益相反  
:なし

出題: 藤本 優樹 (奈良県立医科大学  
消化器代謝内科)  
赤羽たけみ (                    〃                    )  
吉治 仁志 (                    〃                    )